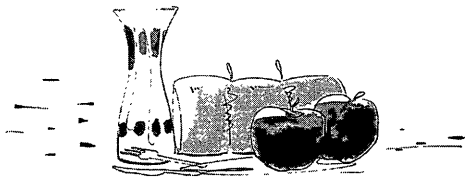
宮坂静生推薦　岳　5月

芽吹く能登生きる根つこをいとほしむ　有手　勉
能登芽吹いざ音楽を降らしめよ　満田光生
受水走水早苗田に瑞の音　依田ひろ
雪解雫弾けひかりの孵りたる　柾木幸子
勁草に夕日やはらか寒梅忌　山﨑和之
浮雲に天蚕糸の光流し　野口美智子
生涯を貫く職や松の芯　丸山貴史
こんな日は無垢なる息吹芽出し肥　矢島栄子
一瞬に命をかける椿かな　小林さなえ
雪嶺やことばはいつも素寒貧　海野良三
流木に噛み疵深し雁供養　山本豊子
蘆の芽や伸び代といふ希望あり　小松市子
陽炎や曖昧といふ心地良さ　小口洋子
日刀保たたら余寒の三昼夜　後藤行雄
雨水の日卵サンドの縁揃え　鏑木ひろこ

*



虫倉の胎内に入る蕨狩　佐藤恵子
明日テストたんと菠薐草たべよ　渡辺真帆
鶯の全身青くなるまで鳴く　倉科繁登
かなんばれ空青くして頬に風　若尾伸子
春風や訃報は全て他人の死　松岡善郎
プーチンもつかのまの有や花見虱　伊藤由希子
教科書に亡霊出ると紀元節　瀬戸正男
閾鳴き生家潰えむ芽吹靄　大澤淳基
師の背中ばかり見るなよ春夕焼　三品吏紀
春雪の桃色父の逝きにけり　草野薫子
ごつぽ石雪解の音を楽しめり　毛利いずみ
就職列車で手を振りし友逝けり　髙田　実
鯛焼屋繁盛犬の譲渡会　西村美枝
涅槃図の象の如くに泣きたけれ　原田ゆりこ
朧月母にもありし少女の日　河西久恵

新たなる半世紀へ ―― 岳俳句五月

宮坂静生

巻頭言　いのちが大事。戦後八十年、叫び続け、聞き飽きたと感じていた、当たり前のことが妙に胸に刺さる。世界は領土拡張、金儲けという「欲」の塊の為政者により攪乱されている。良識あると思われる国連という組織は機能麻痺。一つ間違えば世界戦争になる。いま俳句に問われているのは何か。

本誌の国見敏子が去り、折井眞琴が逝く。こんな日が来ることを思い描いたことはなかった。しかし、現実にその場面に直面して「口うるさい、いじわる婆さん風情」の国見敏子の時代、「華やかさで、気持を昂揚させ賑やかな」折井眞琴の時代、そんな時間が確かにあったことを顧みる。「岳」の骨組みを作り、高揚感を醸した貴重な二人であった。お二人とも天性の美質を磨き上げた努力家であったのではないか。哀悼の心とともに、長く記憶し、語り続けたい。

現代は「疾風勁草」の時代か ― モラルのささやき

勁草に夕日やはらか寒梅忌　山﨑　和之

「寒梅忌」は藤沢周平忌、一月二十六日。激しい風に揉まれながら耐え続ける草が確かにある。僅かな温みを留めた夕日が当たる。地に生きる庶民を描き、敗者が読み手の心中で勝者に転じる「負けるが勝ち」小説周平を偲ぶ。作者はどこかにモラルの手応えが欲しい。そこに共感する読み手が多い。五年くらいはこれでいいが、やがて破れが欲しくなる。その先に何があるか。そこへ来ると、俳句は千差万別。

同人集・岳集から ㊾

芽吹く能登生きる根つこをいとほしむ　有手　勉

能登生れ。故郷の復興がいつも頭にある。このまま潰れることはない。能登の根っことの着想に共感した。地震・風水害とダブルパンチに遭うも生きなければならない。普段多くの者は「根っこ」まで問われることはない。いうならば、惰性で生きていける。これが大方の平和である。ところが、災害は一気に「平和」を覆す。他人事ではない。

能登芽吹いざ音楽を降らしめよ　満田　光生

前書き「オーケストラ・アンサンブル金沢」とある。能登への激励句。せめてもの思いである。藤田湘子に原爆ドームに立った広島詠〈音楽を降らしめよ夥しき蝶に〉（句集『途上』）がある。これを踏まえたいわゆる踏跡俳句。句材が「芽吹」なので、自然への素朴な協賛の味わいはあろう。

受水走水早苗田に瑞の音　依田　ひろ

沖縄南城市玉城にある稲作発祥の地に立つ。受水、走水と呼ばれる二カ所の水田に早苗が植わり水の流れに耳を傾ける。多くの人が句を留める地である。柳田国男に沖縄の稲作に関する『海上の道』の名著がある。「瑞」の一字がすべての源泉を暗示するようだ。私にも小林編集長にも同所詠がある。

雪解雫弾けひかりの孵りたる　柾木　幸子

雪解の雫が煌めく躍動感に着目したもの。私の〈枯山中つぎつぎ光孵りけり〉（句集『噴井』）と同竈か。柾木句の方が具体的なのでわかり易い。「ひかり孵る」のキイに当たる個所はわが句を踏まえたもの。意識のどこかにあったのであろう。

浮雲に天蚕糸の光流し雛　野口美智子

巧い句である。雛祭が終わる。浮雲のいまだ寒気を含んだ清冽な光と流し雛の哀しみ。見事な照応に涙する。成長し大きくなるとはたくさんのものにさよならをすることだ。

生涯を貫く職や松の芯　丸山　貴史

大方は職に就き、生計を立てる。偶然な思いも、なるべくしてなった感慨もあろう。この職で生涯が終わる。充実感を噛み締めている。変転の世にあってこの思いは幸せに尽きよう。ところが、これでよかったのかという贅沢な気持もある。作者は建築に伴う設備士のプロ。

こんな日は無垢なる息吹芽出し肥　矢島　栄子

働き者詠。早春の畑に芽出し肥料を施す。周りはわんさと芽吹きが始まっている。生きている歓びを感じる日である。

今月の秀句

雪嶺やことばはいつも素寒貧　海野　良三

着想とはこのような空っぽから始まる。ああ句ができるかしら。ことばが落ちているわけではない。外に出て、雪嶺を見る。これが切っ掛けで雪嶺観察から何かが開ける。空気がひやっと冷たい。心地いい。山の襞が険しい。圧倒される。「おれは小さい」「人間は弱い」と、ああでもない、こうでもないが始まる。余分なことやもので気持が膨らんでくる。

一瞬に命をかける椿かな　小林さなえ

画家詠である。掲句を読み、思い浮かべたのはかつて諏訪高女の美術教師であった宮芳平の絵画「椿」である。一瞬に命を懸けて描いた「椿」。大正三（一九一四）年第三回文展に出品したが落選した椿の絵に関し、芳平は審査員の森鷗外にその理由を聞きに行く。その経緯が鷗外「天寵」に書かれている。暗い闇の中に浮かぶ椿。「一瞬」に賭ける画家。

流木に噛み疵深し雁供養　山本　豊子

雁が秋に渡ってくる。海上で休むための木片を春に咥えて帰るために青森の外ケ浜に落として行く。春にそれが残っていれば雁は死んだものと思われ、雁供養に風呂の薪に焚かれる由。木片を流木の上に見たもので、切ない句だ。

蘆の芽や伸び代といふ希望あり　小松　市子

葦の芽は『日本書記』の神話に出る。その成長の早さへの期待が「伸び代」とはなかなか連想が拡がる。子どものことから国のはじめの神話まで。葦の芽は植物でありながら物語が凝縮されている。

陽炎や曖昧といふ心地良さ　小口　洋子

いい加減と曖昧とは微妙に違う。曖昧は生きていく上でぶつかる岐路。春は暮しが始まる時だけに曖昧が新鮮に響く。悠々たる気持の人。ちまちましたことで齷齪しないであろう。

日刀保たたら余寒の三昼夜　後藤　行雄

「日刀保たたら」は純度の高い鉄を作り出す日本古来の製

鉄法として知られる。三昼夜寝ないで当たるとは迫力満点。ぐうと日本刀を突きつけられたような驚きに目が覚めた。

雨水の日卵サンドの縁揃え　鏑木ひろこ

たのしい句だ。さりげなくやさしく気持がるんるん。

今でもポパイは生きております！ 菠薐草を食べよ食べよ

明日テストたんと菠薐草たべよ　渡辺　真帆

この古風さが面白い。最後まで投げない気力ですね。それには、ほうれん草がいい。一生懸命な親御さん。スマホやITの時代に何言ってんの。いやいや、負けるなお母さん。

鶯の全身青くなるまで鳴く　倉科　繁登

この鶯は哀しいのか、寂しいのか、いやひたすら願でもかけているのかよく鳴く。作者の執拗な思いが鶯に投入され、見事な鶯詠になっている。鶯をよく見るとはこのような鶯色の先を捉えることである。詠み手と鶯とが一体化している。気持が自由。人間の気持ではなく生きものの心になっている。

かなんばれ空青くして頬に風　若尾　伸子

流し雛の風習を佐久の北相木村では「かなんばれ」（家難払）と呼ぶ。いまに生きる細やかな子どもの行事が淡々と行われている。それだけのことを詠んで、これだけが私の気持という、この上なくさっぱりした句。これが地貌季語。

春風や訃報は全て他人の死　松岡　善郎

自分の死を自分が知ったらこれは大変。前代未聞だ。死を聞くとは他人事。本心を暴けば他人の死は、みんなさばさば。せめて身に響く身内は家族葬に。こんな考えは残酷であるがその上で、死とは何かをしみじみと考えられる。死を死とも思わないプーチンやトランプを批判できるだけの死の哀しみを自分は考えたことがあるだろうか。

プーチンもつかのまの有や花見虱　伊藤由希子

なるほどと合点する。鋭い句だ。独裁者は束の間、花見虱みたいなものとは言いましたね。見事な花見虱詠。

教科書に亡霊出ると紀元節　瀬戸　正男

国民学校時代、二月一日紀元節には「雲に聳ゆる高千穂の／高根おろしに草も木も」と歌った。神話とも知らないで、この亡霊は記憶に納まる。いつかまた教科書が亡霊の栖にならないことを建国記念日に考えようというのである。

今月の秀句

虫倉の胎内に入る蕨狩　佐藤　恵子

全国に虫倉山がある。掲句は栃木県辺の虫倉山か。民話の山である。大姥が棲む山とか、遠野伝説ではないが、里山には住民の暮しに食い込んだ話があろう。山懐は蕨がたんと採れる。それだけでも話の穂がある。その蕨を湯掻いて口にしたものはみんな大姥の魔法に掛り、芋虫に変身などなど。おあとはどうぞ地域の虫倉伝説をお続けなんしょ（ください）。

閾鳴き生家潰えむ芽吹靄　大澤　淳基

わが生家の閾がきいきい鳴いて、盛んな芽吹靄の日に古民家が潰される。想像句のように作られているが、何かが終末を迎える。自分の中で世代が変る思いが胸を打つ句だ。閾の鳴く声は家霊の泣く遠つ祖の呻きか。

師の背中ばかり見るなよ春夕焼　三品　吏紀

芸は師の真似から。茶道や香道などは型の世界。歌舞伎や狂言あるいは落語に至るまでしかり。しかし言葉の創造を基本とする俳句は「背中」くらいでは危ない。堂々と師が求める先を見つめてほしい。作者の言やよし。それでこそ春夕焼は美しい。

春雪の桃色父の逝きにけり　草野　薫子

悲しみの極みが「春雪の桃色」に投影された。崇高な世界である。こんな「桃色」があることに納得する。

ごつぽ石雪解の音を楽しめり　毛利いずみ

「ごっぽ石」とは下駄の歯に付いた雪を払うための石。雪深い加賀の御城下では四つ角にあり、今も見かけるもの。方言のごつごつ感が楽しい。伊東の源丘門下は元気。

就職列車で手を振りし友逝けり　髙田　実

「あゝ上野駅」（井沢八郎）のメロディーが「上野はおいらの心の駅だ」の歌詞とともに響く。青森から上野駅へ。昭和四十年代の高度経済期には中卒の団塊世代が北陸からも。集団就職列車の窓に立つ友へホームから手を振った。十五歳の別れから歳月が過ぎ、友は東京で亡くなる。長い物語が一句となり、ぽつんと詠まれる。その投げ出されたような句が感動を呼ぶ。

鯛焼屋繁盛犬の譲渡会　西村　美枝

広場での犬の譲渡会に急遽鯛焼屋が店開き。売れること大変。偶然という意外性が楽しい。俳句の即興性の面白さだ。

涅槃図の象の如くに泣きたけれ　原田ゆりこ

涅槃図の象は伸び上がって釈迦の死を悲しんでいる。あのように泣きたい。号泣したい。端的で素直な句だ。

朧月母にもありし少女の日　河西　久恵

母からうら若い少女の日を想像するのは難しい。母は私の母。まだ私がいない時代の母はあり得ない。高校の頃、大学の時代。どんな夢を抱いて、父と出会ったのか。ああ切ないほど胸がいっぱいになる。母や父のわが未生以前を思い、出会いの不思議さを空を向きながら思った。涙がこぼれる。

他に推薦候補作をあげる。

啓蟄や家出に良ささうな鞄　奥山　源丘
矜持とはひそと在るもの物の種　志摩　晴樹
海は花器なり群落の水仙花　石井紀美子
ラブ・イズ・オーバー一鉢の室の花　久保美智子
薄氷を踏み生涯を終へむとす　安田久太朗
消しゴムの滓となる句や万愚節　大月　英晴
紅梅の木髄くれなゐ婚決まる　宮原　久子